しと云ふ。

其後桃雲寺と同様木原氏の信仰厚く、爾來木原家にて管理する所なりしが、桃雲寺と共に益々衰頽し、遂に堂宇倒壞の悲境に至りしを以て、明治十三年八月桃雲寺に附隨して、馬込村萬福寺に移すことゝなりしが、同十七年七月信徒一同協議の上、舊境内地は本郷區元町二丁目山田すゞの所有なりしを買戻し、信徒總代平林逢之助、平林忠左衞門、加藤平十郎、平林半三郎、長谷寺住職萬福寺兼務北越具戒の諸氏より、東京府知事へ元の安置の地に移したき旨願出で認可せられたるを以て、直に舊地の堂宇に移轉せられたり。當時信徒總代として加藤龜三郎、皆川兼藏、平林幸藏、臼田市左衞門の諸氏、世話人としては加藤平十郎、平林半三郎、平林逢之助諸氏の盡力に依り毎月八日夕刻より善男善女打寄り、和讃或は御詠歌を唱へ、參詣人もまた多數にて、其の日を緣日とし以て今日に至る。現今信徒の總代は加藤龜三郎氏、世話人は平林龍八郎、平林鐵五郎、平林半之助、加藤平太郎、町田久太郎、平林半三郎、平林豐次郎、中村藤吉の諸氏なり。

又同堂に寶物として保存せらるゝものに、元桃雲寺御拜柱に取付けありし木彫の獅子一對、及鎧掛松(鎧掛松のことは天祖神社の項にあり)の枝にて造りたりと言ひ傳へたる大臼一個あり腐朽し居れど臼の形は存せり。

昭和二年十月十五日印刷
昭和二年十月二十日發行

（非賣品）

東京府荏原郡入新井町大字新井宿一、五七〇番地
編者　角田長藏

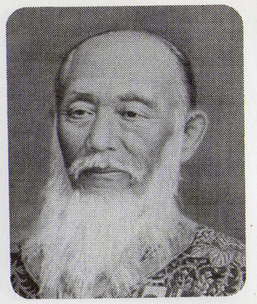
東京府荏原郡入新井町大字新井宿一、二九〇番地
編輯兼發行者　岩井和三郎

東京市麹町區隼町四番地
印刷者　小林又七

不許複製

發行所　東京府荏原郡入新井町大字新井宿一、二九〇番地
入新井町誌編纂部

倶楽部代表者

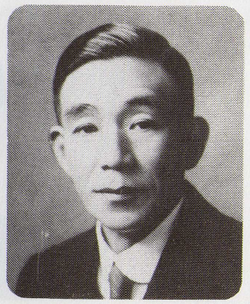


初代委員長　児島惟謙
（法曹会館所蔵）

二代委員長　加納久宜
（上総一宮町役場所蔵）

三代委員長　清浦奎吾

初代理事長　岡本英太郎
（農林中央金庫所蔵）



二代理事長　渡辺譲吉

三代理事長　中村三郎

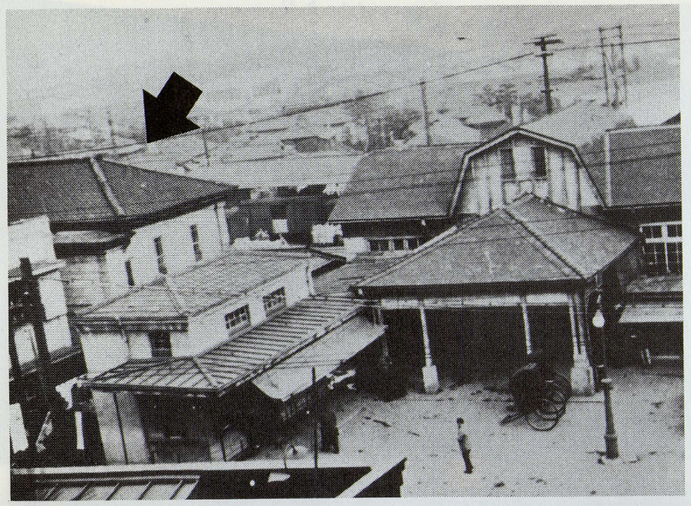
贈呈

このたび当大森倶楽部創立八十周年記念事業の一環として「大森倶楽部八十年史」を編纂いたしましたのでご高覧いただきたく贈呈申し上げます

昭和六十三年　新春

社団法人 大森倶楽部
理事長　千葉　博

各位



◀倶楽部（第二次会館）と
大森駅（昭和10年頃？）

①清浦奎吾米寿祝賀宴（昭和12年５月30日）
②渡辺譲吉　③立花種忠　④遠藤勝次郎　⑤津久井利行　⑥酒井熊次郎
⑦砂岡清兵衛　⑧岡本英太郎　⑨亀井新一　⑩内村良二　⑪横山英太郎
⑫中村三郎　⑬坂本一　⑭東奭五郎　⑮小倉新兵衛　⑯眞野紀太郎
⑰平林庄太郎　⑱塚本藤三郎　⑲内村省三　⑳間島與喜　㉑事務員吉田
㉒武百太郎

入会申込書

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治37年5月7日
住所 入新井村字金杉三七七番地
職業 金杉医
姓名 矢野恒太

入會申込書
大森倶樂部ニ入會致度此段申込候也
明治四十四年一月廿三日
住所 入新井村字新井宿八景坂上
職業 官吏
姓名 子爵清浦奎吾
紹介者 矢野恒太

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治[illegible]年三月十二日
住所 入新井村字新井宿二五五番地
職業 東京朝日新聞社員
姓名 杉村廣太郎

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治四十三年八月二十日
住所 荏原郡大井町字鹿島谷九八二番地
職業 新聞社員
姓名 上野精
紹介者 杉村廣太郎君

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治四十年一月廿一日
住所 入新井村字新井宿
職業 [illegible]
姓名 岸本新三郎
紹介者 坂田立郎

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治41年1月5日
住所 入新井村字山王二七三番
職業
姓名 平林庄太郎
紹介者 坂田立郎

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治四十二年七月三十三日
住所 大森字山王間島郎
職業 [illegible]
姓名 池田武雄
紹介者 [illegible]

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治[illegible]年十一月[illegible]日
住所 大森字山王[illegible]
職業
姓名 横山英太郎
紹介者

入會申込書
大森倶樂部入會致度此段申込候也
明治四十五年三月十二日
住所 大森字本宿山
職業
姓名 高橋義人
紹介者 矢野恒太

入會申込書
大森倶樂部ニ入會致度此段申込候也
昭和四年九月十六日
住所 入新井村字新井宿三三一番地
職業 官吏
姓名 宮下武一郎
紹介者 [illegible]

入會申込書
大森信和會ニ入會致度此段申込候也
昭和[illegible]年十月三日
住所 大森区馬込町東三一七六三
職業 著述業
姓名 室生犀星
紹介者 宮下武一郎
190

入會申込書
大森信和會ニ入會致度此段申込候也
昭和[illegible]年五月[illegible]日
住所 大森区馬込町[illegible]八
職業 朝日新聞記者
姓名（筆名）上月進
紹介者 石井光次郎
231

十一、牛込区……89
十二、小石川区……96
十三、本郷区……99
十四、下谷区……111
十五、浅草区……120
十六、本所区……124
十七、深川区……136
十八、交通機関……140
十九、関東大震災……154
二〇、味覚……170
二一、補　遺……187
あとがき……199

一　この書物を書いた理由

私は大正十三年の暮から現在の所に住んでいる。今は大田区南馬込三丁目だが、引っ越して来た当時は荏原郡馬込村小宿であり、馬込町東一丁目といった時代もあった。大正十三年は関東大震災の翌年であるので、大工の足りない時代で、請負師も大工も素人のようなものがいた。大森駅から徒歩七分という新聞広告を見て来たのだが、大森駅のすぐ上の木原山を通って行くのが一番近道で、それでも二〇分かかるところである。

木原山は、木原という陸軍少将が住んでいたのでその名前が付けられたと聞いたが、同少将は最早おられなかったが割合に住宅が発達していた。私の家はある代議士の注文したものだそうだが、金の支払が得られそうもないことがわかったため、大工が泊り込んでいたので、外観は良い感じを持ち買ったのだが、住まって見たら

随分悪い建物で、窓から雨が吹き込む次第なので改築した。

私は東京に生まれ、東京で育ち、外国に居たり、旅行したり、戦時大阪地方に住まった二年間を合わせて七、八年間を除けば、九十二歳になる今日まで全部東京に住まったし、交通機関が不便な時代だったから、可なり遠方でも歩いたので、東京の町々は相当知っていると思うのだが、牛込は東京十五区の中にあるが馬込という名前は聞いたことはなかった。来て見ると馬込には九十九谷があるそうで、池上の本門寺の坊さんに白渓と号する和尚があったそうだ。九十九歳の祝を白寿の祝と呼ぶのと同じ意味であろう。その谷もその後大分埋められて住宅が建つようになった。そのような地勢であるので、田はなく、畠が多いので百姓は野菜を作り、大森海岸から船で東京へ出すので、なかなか辛い日常生活であったという。

私の所もごぼう畠であったそうで、その南端の一軒家であった。南の方は土を取り去って崖の下は平地なので眺望は良い。東隣は本郷西片町の阿部華族の大きな別邸で、多くの盆栽があり、植木屋が住宅を建てて住まっており、菊の季節には立派

な菊を公開していた。西隣は田尻稲次郎氏が二軒の住宅を建て、一軒には令息が住み、一軒には自分で住まわれたが、私が引移ったときは最早故人になっておられた。

阿部邸の上を越して青い海が眺められた。この辺は源氏の落人に関係があるようだ。近くに観音堂があるが、臼田某が頼朝からもらったのを安置したという話である。臼田姓は近所に多く、近くにある坂の名は臼田坂といっている。また宇治川の先陣争で有名だった名馬する墨もこの地で死んだようで、近くにする墨塚と称し、大きな石碑が建っている。野菜が良いので村役場で年々品評会を開いていた。

すぐ近くに山の中の林道のような細い坂道があり、右近坂といい、その下に一メートル四方位の水槽が地中に埋めてあり、清水が湧き出ていて、そこで野菜を洗っており、五〇〇メートルばかり南にも同様なものがあった。そこから大森駅の方へ行くには谷中通りを横切るのだが、道路の幅が広く中央に大きな溝があり、大雨のとき水が溢れて通行できないので困ったことがある。戦後も昭和四十年代と思う

が、その溝をコンクリート円筒管に代え、地下に埋めて大きな通路にした。

これが環七であって、当時今日のような繁昌は夢想もしなかった。私の家の西の方少し離れた所に、にじ穴と称した古墳の跡があったが、今日その辺は第二京浜国道が通った賑やかな土地になった。臼田坂も幅を広げ真直で勾配も緩かに改造されて便利になった。私がこの辺の模様を詳しく述べたのは、私がこの随筆を書いた理由に関係があるからである。大田区役所が時々大田区報を出すようになったとき、ある作家が馬込の古い事情を説明する意味で馬込の古いことを書いた。私がそれを見ると随分違った新しい時代の模様であった。

それ故古いことが後に何かの参考になるためには、古い人がその実情を書いておかなければならないと感じたからである。

私は品川の御殿山にいたとき電話を申し込んだら幸いに設備してくれた。当時は電話が不足していて国鉄のごときも、なかなか思うように設備できなかった。そこで品川から大井工場長官舎へ移転したとき、従来の官舎の電話は他に利用したいか

ら、自分の電話を官舎へ移してくれといわれたので、その通りにした。同官舎から現住所へ移ったときに、大井の官舎から現住所まで電話を移すのには、だいぶ高い料金を支払わなければならないが、それは国鉄が負担してくれた。しかし移した電話は東京電話であり、この地域は大森電話の管轄であるので、私宅から近辺の店へ電話をかけるのは長距離電話の申し込みをして、だいぶ時間を待たねばならなかったのであり、大正の初めに東京から横浜へ電話をかけるには、申し込んでから少なくも半日待たなければならなかったのである。

関東大震災の後の復興に当たり自動式電話が採用され、その後著しく改良されて、大森電話も東京電話に繰り入れられたのである。

序ながら大森の模様を述べて見よう。私が大森を初めて知ったのは明治三十三年頃と思うが、東京府第一中学校から、大森の射的場へ実弾演習に来たときである。実弾演習をしたのだから、当時その辺が辺鄙な所であったことは推察できよう。射的場は駅よりだいぶ高い所にあり、そこへ行くには駅前の石段を上る近道もある

が、普通の道路を行くとすれば、それより南方一〇〇メートルばかりの所にある曲った坂を上らなければならないのであり、大森では八景坂が有名であるので、これが八景坂と思ったら、そうではなくて、この坂は無名で、くらやみ坂と呼ばれている。八景坂は駅前の道路にあるのだが、今はほとんど坂とは思えないほど平坦である。

大森は高級住宅地として早くから発達していた。駅の西側が住宅地であり、道路に沿うて線状に開けたのであり、北側は山王と称する地域で、高級住宅が多く、清浦伯爵の住宅もあった。昔は政府の高官の言動は尊重されたようであるので、大森駅では名士の小言のあるのを恐れたようである。だいぶ後のことであるが、私の家へ大森の駅長が訪ねて来て、恐る恐る一枚のはがきを出して謝るのだが、私には何のことだかわからなかった。私が国鉄の役員なることを知り、近所の人が私の名を使って、小荷物係の不親切を駅長に訴えたのである。世の中の気風の変化を思い起こすのである。

駅から南方には池上本門寺方面へ行く狭い道路があり、表通りに相当の長さの所まで商店が発達し、住宅も飛び飛びにあった。この道路上に小形の馬車を本門寺まで運転していた。今はこの道に区役所や郵便局が移って、大森の重要な地区となり、これから池上街道から離れて、目蒲線の池上駅まで広い真っすぐの良い道路となった。

私が車両課の数人を私宅に招待したとき、その馬車屋に話し、貸切馬車として臼田坂まで来てもらった。坂は今と違って曲がっていて急なためその馬車では上れないのであった。駅の北側線路に沿って野中鰻店の支店があると思うが、そこは元大森倶楽部であった。私も勧められて入会した。通勤客の寄合いにも使われたが、主たる用途は自分の傘を預けておくためであった。帰途雨天になるときに便利なのである。

駅の向かい側に資生堂がある。日本一の化粧品店の支店である。これが大森が高級な地区で物価が高いといわれた一つの証拠かも知れない。大井は物価が安いとい

われた。大井の発達が後れたからではあるが、東横線の連絡駅となってから、その発達は著しい。大森には私設電車との連絡がないのは地勢のためと思うが、近来は工事が進んだので、山王神社の下をトンネルで抜け、私設電車のどこかの駅と連絡すれば、相当利用されるのではないかと思っている。

駅の東側は線路に直角の一本の道路に、有名な海苔屋などがあり、相当に発達していたが、昔の街道に出ると鈴ケ森で、淋しい所であってまだ田が多くあった。今の羽田飛行場へ行く手前に穴守神社があり、そこに田舎らしい料亭があった。海岸に工場のできたのは、土地の資産家渡辺氏の日本特殊鋼会社が初めであったろう。その後東京瓦斯電気会社や、いすゞ自動車工場などができて、蒼田変じて町となったのである。

鈴ケ森に松浅本支店の外多くの料亭ができて、昔の面影がなくなったのは、昭和の初めごろと思う。大森の大と、蒲田の田を組み合わせた大田区の人口は、世田谷区とともに東京二十三区のうちで多い方で、地方ではこれだけの人口のあるのは大

都市である。そこで独立の市になりたいという人も可なり多く、時世の進歩の速いのに驚くのである。